

●国際生理学会教育ワークショップ報告

近畿大学名誉教授, 近畿大学医学部顧問 松尾 理

国際生理学会教育委員会主催の教育ワークショップがIUPS Birmingham大会の直前の2013年7月18日から21日までイギリスのBristol大学で開催された。筆者は、本教育委員会の委員でもあり、また本ワークショップのプログラム委員でもあり、また前回の教育ワークショップの組織委員長であったので、いろいろサポートした。

今回の主題は「参加者の教育能力を上げよう：その傾向、秘訣、そして評価」で、48か国から128人が参加した。この教育ワークショップは毎4年ごとに開催されているが、約2/3がリピーターで、生理学教育の質の向上のため自己啓発を継続的にしている姿勢が垣間見えた。

プログラムの特徴は、中身を5つのトラックに分けて、それぞれをA~Cの3セッションとして、計15のテーマで実施したことである。トラック1：コースデザインとリーダーシップ養成：Session A：オンラインでの実践，Session B：地域社会での教育ワークショップ運営，Session C：コースの改善。トラック2：教育の革新的取組：Session A：学生の学習を促進するデジタルおよびモバイルテクノロジーの応用，Session B：チーム基盤型学習，Session C：症例および問題基盤型学習。トラック3：学生およびプログラム評価：Session A：MCQ評価と試験のブループリント，Session B：試

験問題の標準的な作成法，Session C：教育方略で自己評価を使う。トラック4：社会との関わり：Session A：社会を巻き込んだ活動を活発にさせる方略，Session B：カリキュラムへの社会的関与，Session C：生化学教育における共同ネットワーク。トラック5：教育研究の出版および実習実技のデモ：Session A：アメリカ生理学会発行の教育専門雑誌「Advances in Physiology Education」での教育研究の出版，Session B：実際の生理学的情報収集への学生の参加，Session C：生理学教育者に対する学習手技の混合。参加者はこれらの中から自分のニーズに合ったセッションに参加して、討論やミニレクチャーなどを通じて到達目標にアプローチして行った。

またPlenary lecturesとして次の講演が行われた。Plenary 1：Dave Lewis（英国）。倫理的に認知された生理学者：生理学の学位プログラムに倫理的問題を理解させて、取り組める能力。Plenary 2：Murray Jensen（アメリカ）。学生中心の方略を用いた解剖学と生理学の変換：新しいカリキュラムへのアプローチを議論する。Plenary 3：Sarah Baillie（英国）。教育を改善するためシミュレータをどう用いるか。Plenary 4：Tony Macknight（ニュージーランド）。技術の進歩と古典的生理学実習：両者の融合を求めて。Plenary 5：



(参加者の全員写真)

Beatriz Ramirez (チリ)：カリキュラムの変更を行う際役立つ情報。これらは、ある意味モデル講義的でもあり、参加者は内容と同時に上手なプレゼンの仕方を演者のパフォーマンスから学び取ることが出来た。

多数のポスター発表があったが、その中から優秀ポスター5人が選ばれ、内容紹介が short talk として行われた。参加者は写真のように国際色豊かな顔ぶれで、最後の夜はそれぞれのお国柄を表す「芸」を披露するのが恒例で、今回も大変盛り上がった。

本教育ワークショップ中に開催されたアメリカ生理学会教育委員会会議に参加する機会を得た。この教育委員会の活動は、初等教育から始まり学

部教育や若い科学者を生理学教育に長けた教育者になれるようにリードすることを使命としている。そのため、各階層に適した素材の提供や講習会、あるいは e-learning などを駆使して学習機会を設けている。また生理学者には生涯教育としてリフレッシュコース、専門スキルコースなどを設定し、活動している。さらに医学生理学へ特化した素材の提供を行うと共に、他学部での基礎的生理学や科学教育への支援も行っている。このような幅広い取り組みで国民に生理学を浸透させようと言う意図が充分汲み取れた委員会であった。そして日本生理学会教育委員会活動をさらに活発にしなければと感じた。